

第 69 回 歴史リレー講座 臨時企画「ブラタモリの法隆寺の見方」(R2.6.21)

今回は、新型コロナウイルス感染症の影響で予定を変更し、先ごろ NHK テレビで放送された「ブラタモリ」をおさらいします。同番組にナビゲーターとして出演した平田政彦（斑鳩町教育委員会参事・考古学技師）と、「縁の下の力持ち」として制作に協力した岡島永昌（王寺町文化財学芸員）の二人が講師となり、トーク形式で行います。

<平田> 番組のタイトルは「法隆寺～なぜ法隆寺は 1400 年愛され続けるのか？～」でした。法隆寺の南大門で出会うところから始まり、今に残る西院伽藍や、西院伽藍が再建される前の若草伽藍などを案内しました。タモリさんの知識や関心は優れたもので、いつもテレビで見るように発言も的確で驚きました。

<岡島> では皆様ご存じの通り、法隆寺を創建したのは聖徳太子ですが、なぜ飛鳥から離れた斑鳩を選んだのでしょうか。それに、境内の標高は 60m（王寺中学校と同程度）と周囲に比べて随分高いことが気になります。

<平田> 法隆寺は、大和川の支流である富雄川と竜田川に挟まれています。それゆえ大雨が降って大和川が決壊すれば水没の危険性があるのですが、矢田丘陵の一部を利用して造られているため（大和川との標高差は 30m）水に浸かることはありません。さらに、推古 16 年（608）、遣隋使の小野妹子が答使の裴世清（はいせいせい）を伴って帰朝した際、飛鳥の都へ向かう船上からも法隆寺が望めたはずで、仏教施策をはじめとする先進性や寺院を建立する高い技術力等を隋にアピールするには斑鳩が絶好の地であったはずで、これが太子の思惑でした。

<岡島> タモリさんたちは王寺町の明神山にも登りました。奈良盆地、大和三山、法隆寺が位置する矢田丘陵、大和川の亀の瀬、大阪平野をぐるり一望することで、斑鳩が大和川を通じて難波津と飛鳥を結ぶ交通の要衝だったという歴史を実感して頂けました。『日本書紀』によれば、裴世清は推古 16 年 6 月に難波津に到着、飛鳥到着は 8 月とあります。難波津から飛鳥へのルートを通ったのが問題ですが、私としては、江戸時代でも大和川の遡上には何日も要していたのに、最上級の要人をそんな船に乗せたとは思えません。しかも、亀の瀬で船を変えなければなりません。たくさんあったであろう荷物は、大和川の船で運び、人は陸路を使ったと考えられないでしょうか。そこで注目されるのが龍田道と太子道（斑鳩と飛鳥を結ぶ直線距離約 20km の「筋違道」）です。斑鳩は難波と飛鳥のちょうど中間地点にあたり、陸路の休憩地も兼ね備えていた。こういった可能性も斑鳩に法隆寺が造られた理由の候補に加えて良いと思います。

<平田> 確かに、船で飛鳥まで遡上しようと思うと何日かかかるわけですが、49 日もかかったのは途中の土地も案内しながら向かったと考えています。もし陸路を利用したのなら太子道も利用したでしょう。私は、太子が飛鳥地域から斑鳩に移った背景には、斑鳩と飛鳥を結ぶ道が存在していた上に、新しい国づくりのために蘇我氏から睨まれるような政策を断行するためにも蘇我氏との距離をとる必要があったのではないかと考えています。推古 13 年（605）、斑鳩に一族で移り住んだ太子はその後政治の第一線から身を引き、仏教に邁進します。そして太子の死後、643 年に蘇我入鹿により斑鳩が襲撃され上宮王家一族は滅亡しますが、太子の設定した蘇我氏からの適度な距離による防衛システムが残念ながら作動しましたが、山背大兄王は生駒山に一旦は逃げおおせています。斑鳩が、蘇我氏から身を護る絶妙な地だったことが証明された格好です。

<岡島> 最後に、『日本書紀』には太子が日本における仏教の始祖として描かれており、深い太子信仰は現代まで脈々と生き続けています。太子にまつわる伝承は日本全国に見られ、ここ王寺町では達磨寺（だるまじ）や片岡山の飢人伝説、伝承地名「送迎」（ひるめ）、安堵町には太子が座ったとされる「腰掛石」、三宅町の筋違道、大阪府太子町にある太子の墓などがあり、その証といえるのではないのでしょうか。

<平田> おっしゃる通りです。そもそも法隆寺は太子追善の寺であり、本尊である釈迦三尊像は太子を写して造られたといわれます。いよいよ来年は太子没後 1400 年という記念すべき節目の年。この先も太子信仰は連綿と人々に受け継がれていくことでしょう。